

武者小路実篤の人生私観から継承すべきものとは —『人生論』（岩波新書、1938年刊）の整理と分析—

谷川和昭（関西福祉大学）

「人生」（人生私観）を真正面から論じている武者小路実篤著の『人生論』正編は、演者の見地からすれば人間関係を考える上での指針の一つとなっている。本著は1938年刊行時のものが絶版となったが、それ以後も出版社を変えながら発行を繰り返し続け長く読み継がれている。本研究では、『人生論』が何を論じているか、本著をただ読むだけではわかりにくい構造を理解し、後生が継承すべきは何か明らかにすることを目的とする。正編全64章のデータを整理し、分析した結果を合わせて考察する。

キーワード：人生、生きがい（生き甲斐）、幸福、人間関係、人間関係力

1. 研究の背景

武者小路実篤の『人生論』（正編）を手に取ったのはいつ頃のことか思い出せないが、おそらく10年ほど前か。私的なことで恐縮ではあるが、私は「どう生きるか」何か参考になりそうなものはないか探していて偶然にも古本屋で購入した。実際に読み始めるのは2013年も暮れの頃である。2014年の春季休暇中に当時のゼミ生には全文を読破するよう指示した。その後、2016年9月と12月に古典読書会を開催する機会に恵まれた。指定図書は『人生論』を挙げた。あれから3年の年月が経つが、現在にあってもなお自身への影響を与え続けているのが本著だ。人間関係を考える上での指針の一つとなっている。本著は、「人生」（人生私観）を真正面から論じている。

山室静は、「これは氏がこういう題をはじめて選んで、心を打ち込んで書かれたものだけに、正面から人生と取組んで堂々の論を張ってられる。やはり氏の「人生論」の本命とすべき論文である。1938（昭和13）年、54歳のときに「岩波新書」のために書きおろされたもの。」と述べている（p.381、新潮文庫、1969年）。武者小路は、1885（明治18）年5月12日生まれであり、この誕生日は「看護の日」でもあり、「民生委員の日」でもある。演者は大学等で、看護学部と社会福祉学部双方の学生を相手に授業を行っているため、何か縁の不思議さを感じさせられる。

中川孝は、「日本文学のなかで『人生論』を書くにふさわしい人をかぞえるとすれば、まず自然に武者小路実篤先生の名をあげるであろう、とはだれもが異論なくみとめるところです。」と強調

する。そして、「人生論」ということばは、「私達はどう生きるか」ということと同じだという。

武者小路が詠った詩に、次がある。

この道より
我を生かす道なし
この道を歩く

「この道」とは何を指すか。中川は『人生論』を要約すると、「すべての人間が、ほんとうに人間らしく、自分の天命をまっとうし、自分の個性を生かすことができ、すべての人間が自己の真価を生かすことで満足しうる世界がきたとき、はじめて人類の平和がくる、この彼岸を一步一步築きあげてゆくことこそ、人間の生きてゆく目的である」と説いた。「この道」＝「人生」と言える。

ここで、武者小路実篤が著した『人生論』の序を少し引き写しておく。序にはこう書かれてある。

「この本だけ読めば僕が人生に就いて感じていることがわかってもらえるように書きたかったので、他の本を読む必要のないように書くことにした」（p. i、岩波新書、p.8、新潮文庫）。

この本は1938年11月20日に出版、序は同年9月5日に書かれたものだ。岩波新書と新潮文庫には「序」が掲載されているが、1955年出版の角川文庫版では省かれてしまった。なぜ人生論という題にしたのかの理由については序を読んで初めて分かるため不可解なことではある。また、本著の題にした理由は、初めにはっきり浮かんだ題だからと書かれてあるが、『人生私観』（の題）も武者小路は適切だとしている。本研究の主題に

「人生私観」を用いているのはここに根拠を置く。さらに『人生論』であるが、先の中川は、本著を「もっとも重要な一冊」とし、武者小路自身が、「ぼくの著作がどういう目的で書かれているか、この本を読めばだいたいわかると思うので、この本はぼくの全著作の序文とも見ることができる。」と言い切ったという歴史的証言をしている。本著を本研究の副題に置き、研究対象そして研究方法とした理由がここにある。

いずれにせよ、武者小路実篤の人生論は今日もなお影響力を持ち続けている。「読書メーター」(日本中の読書家とコミュニケーションできるWeb)のレビュー数を見ると、2014年1件、2015年2件、2016年1件、2017年0件、2018年2件、2019年1件とほぼ毎年何等かの投稿がなされている。また、アマゾンのカスタマーレビューでも2003年、2006年、2015～2016年にそれぞれ1件ずつの投稿内容が確認できる。投稿件数は僅かとも言えるかもしれないが、長らく絶版しているにもかかわらず、岩波新書赤版にレビューが寄せられたという点を評価したい(2019年8月27日現在)。

2. 研究目的

武者小路実篤はその著『人生論』において何を論じたのか。本研究では、本著をただ読んでいただけでは気づかない、または気づきにくい潜在的な構造を探り、その理解を試みる。そうすることによって、武者小路実篤人生私観から後生(後進)が継承すべきものとは何であるのかを明らかにすることが本研究の目的・ねらいである。

3. 研究方法

本研究の目的達成のために、『人生論』正編・全64章をデジタルデータ化した上で計量的に内容の整理・分析を試みた。統計解析にはユーザーローカルテキストマイニングツールおよびKH Coderを使用した。

4. 研究結果

(1) データ

文字数は全部で93,206文字であった。総抽出語数は59,167語、異なり語数(単語の種類)は

3,259種類であった。出現頻度の高かった抽出語は、人間681、人458、自分382、仕事246、他人196、自然178、健康130、生命109、愛72、心71、人生71、人類67、生活64、であった(抜粋)。

(2) 感情の傾向

1) ポジネガ

文章に含まれるポジティブとネガティブな感情の文の存在比をみると、「ポジティブ」21.9%、「ネガティブ」42.1%、「中立」36.0%であった。

2) 感情

文章に含まれる各感情の度合いを数値に換算すると、「喜び」30.3%、「好き」25.9%、「悲しみ」74.5%、「恐れ」48.6%、「怒り」70.8%であった(全ての感情の平均値を50%とした偏差値)。

3) ポジネガ推移(略)

4) 感情推移(略)

(3) 多変量解析(略)

(4) 特徴語—人生・生きがい・幸福(略)

5. 考察

武者小路実篤の『人生論』は何を論じたのか、データから一目瞭然であった。つまり、「人生」よりもむしろ「人間」について論じていた(頻出語は「人間」681回、「人生」71回の出現)。しかし、単に人間について論じたのではない。佐藤啓子は、人間関係を、かねてより「自己」と「人」と「物」(課題や価値、言葉などを含む)との関係を基盤に論じているが、『人生論』の構造もまたそれを彷彿させるものがあり、「自己・人・物」の三者で成立していると言っても過言ではない(頻出語は「自分」382回、「人」458回・「他人」196回、「仕事」246回・「生きる」204回の出現)。また、佐藤は、人間関係力とは、自己も人も物も共に生かされ創造されることに働く力のことと指摘していた。武者小路人生私観としての『人生論』を読み解き、継承すべきものは、共に考え、共に創る人間関係と人間関係力なのではないだろうか。